

論説・解説

女たちと大騒ぎし、酔った安積は節分の豆まきをまねて金をまく。この宿は理太夫旅館だといわれている。

八郎は、この席で「騒ぎには加わらずに、ひっそりと座敷の中の混乱を見ていた」（『回天の門』）高代という遊女と巡り合う。高代は熊出村（鶴岡市）の出身で翌年、八郎の妻となり、連と名前を改めた。61（文久元）年、八郎は幕府に追われる身にお運は同志とともに投獄され、翌年亡くなった。

鶴岡市湯田川温泉は、庄内町出身の幕末の志士、清河八郎が妻と出会った場所で、八郎が事上つくった浪士組を母体とする新徴組が住んだ地でもある。八郎が暗殺され、浪士組、新徴組が誕生した1863（文久3）年から150年。湯田川温泉の有志らが「清河八郎を学び語る会」（高橋茂会長）を結成し、歴史を生かしたまちづくりに乗り出した。

清河八郎は55（安政2）年、母を連れて約半年間、全国を旅し、旅日記「西遊草」にその記録を収めた。伊勢神宮（三重県）を参拝し、金刀比羅宮（香川県）や錦帯橋（山口県）まで足を延ばす大旅行。鶴岡城下を出発した八郎親子らは湯田川の温泉



旅館「軒負」で休み、酒宴を開いた。軒負は一昨年まで営業していた大屋旅館だとい

清河八郎と湯田川温泉

論説委員 伊藤 哲哉

に山形の旅人の系譜に加えるべきではないか」と語った。

シンポジウムに先立ち、参加者らは大日坂峠や岩谷千体仏など「西遊草」に関連する近辺の場所を訪ねた。

湯田川温泉は昨年が開湯1300年という歴史を持つ。江戸時代には20軒ほどの宿があり、100軒の家が並ぶ街道筋のにぎやかな温泉場だったという。清河八郎をめぐる幕末史を観光資源に加え、さらに魅力を高めてほしい。

幕末史を新たな魅力に

八郎は逃亡中に浪士組の結成を幕府に献策し、実現させた。63年、浪士組は上洛する将軍を警護するため京都に入ったが、ひと月足らずで江戸へ戻った。この際、浪士組から分かれた近藤勇、土方歳三らのグループが壬生浪士組、その後新選組となる。八郎は江戸で暗殺され、浪士組の本隊は新徴組と名前を変えて江戸の警備を担う庄内藩に預けられた。

湯田川温泉には新徴組の隊士らが眠る墓地がある。新徴組は戊辰戦争が始まった68（慶応4）年から約2年間、湯田川に住んだ。隊士1336人と家族は湯田川の旅館、民家37軒に分宿し、単人旅館に本部を置いた。同旅館には新徴組が使っていた弾薬箱などが残っている。

「学び語る会」は、同温泉の関係者や東京のNPO法人「元氣・まちネット」（矢口正武代表＝戸沢村出身）のメンバーらが立ち上げた。「まちネット」は、八郎が学者を志して家出し、江戸へ向かった奥内ルートを「回天の道」と名付けて踏査したほか、湯田川を含めた「西遊草」の奥内ルートも歩いた。

八郎と湯田川温泉をテーマにしたシンポジウムを今月、湯田川地区コミュニティセンターで開催。山本陽史山形大基礎教育院教授が講演し、母親との旅行のほか京都や北海道など各地を旅している八郎について「旅行家としても特筆すべき存在だ。芭蕉や英

国人旅行家「ザベラ・バード」とも